



## 京都モノがたり— ②

京都に歴史を刻み、洗練を極めてきた京の銘品の数々。伝統工芸にかくれた物語をご紹介します。

大きさ、色、形がいろいろある京こまは、雅な色合いが京都らしい。手前の赤いこまが、西陣織を使用した昔ながらのクラシックタイプ。

# 京こま

こまと聞いて思い浮かべるのは、木や金属などでできた円形の胴に心棒が通ったものではないだろうか。正月になれば手や紐で回し、家族や友人と競った思い出がある人もいるかもしれない。

前述のこまと京こまが大きく違う点の一つに、素材がある。驚くなかれ、京こまは顔料で染めた木綿糸を束ねて平たい紐状にし、心棒に巻き付けて作っているのだ。巻く前の平紐を触ると、木綿だと分かっているとしてもその触り心地や重さから紙かと錯覚してしまう。

京こまのはじまりは、安土桃山時代と考えられている。上流階級の女性たちの遊び道具だったそうだ。当時の素材は着物の生地、心棒は竹。現在と同様に心棒に巻き付けて作られ、でんぷん糊で留めていた。「布を巻く」というシンプルな製法は古くから用いられていた手法で、奈良時代の仏像には漆で浸した麻布を貼りつけていく乾漆技法かんしつぎほうが使われてお

り、古来なじみのある製法だったことがうかがえる。

### 作業は地味だができあがり華やか

昭和初期以降、現在のような木綿の平紐が用いられるようになった京こま。心棒に平紐を手で巻くというシンプルな工程ゆえ、使用するのは糊とハサミのみ。指の感覚を頼りに巻き付けていく。

まずは巻かれた状態の色とりどりの平紐をほどこき、指でしごきながらまっすぐにして端を糊で心棒に留める。巻き始めは慎重にしっかりと締め、しばらく巻くとあとは力加減を一定にする。力の調整は経験がなせる技で、また、心棒に対して水平に巻くのも難しく、同じ幅を保って右手で巻きを進め、添えた左手で同時に形を整える必要がある。リズムカルにテンポ良く進め、1色巻き終わると次の色へ。継ぎ目は紐と紐を重ねてしまわずほんの少し隙間をあけて糊で留め、再び巻き始める。紐が重なり少し



木綿の平紐を指でしごくと、このような状態に。赤や黄などよく使う基本の伝統色は15色ある。



こまの技術を使って祇園祭の山鉦の置物も制作。祇園祭期間中は、山鉦の近くで出張販売も行っている。



水平に巻けているか、幅が均一になっているかを確認。糸が出たらハサミで切って整える。



出来上がったこまはすべて回転状態をチェック。軽くて回しやすく、初心者や子どもにもやさしい。



賀茂なす、聖護院かぶなどユニークな京野菜のこまは土産として人気が高い。

でも段差が生じると、水平が保てないという繊細な作業だ。

円周が大きくなってくると次第に巻く力を緩め、最後は糊で留める。巻く工程自体は20分ほどと短く、この後巻き終えた平紐を上下に動かしながらほぐし、硬さをまんべんなくして表面がなめらかなれば円錐に形づける。色が織りなす“柄”の幅を横から見ながら均等になっているか、回してみてもっと回ると回転するかを確認、微調整を繰り返し、ウレタンやニスでコーティングして仕上げる。

### たくさんの京こまを世に送り出すために

昭和初期に10軒あった京こまの店も、現在は二条城近くにある雀休1軒のみ。すべて手作業の工程は量産が厳しく、また、決して高いとはいえない京こまを土産物店に卸すのみであったため、職人の多くは廃業を余儀なくされた。「うちも廃業し、父は

転職しました。しかし、子どものころに制作を手伝った京こまが店頭で並んだ時の感動が忘れられなくて、脱サラをしてこの道を選んだのです」と雀休の中村佳之さんは語る。

卸売りから始め、後に店を構えるようになり、百貨店などの催事にも声がかかり広く知られるようになったが、単価が安く手間暇がかかることには変わりはない。そこで中村さんは効率化に知恵を絞った。糸染めは染屋さんに依頼し、自分は巻く工程に集中。さらに、巻き幅をその都度定規で測って確認していた先代のやり方を改め、必要な巻き幅に対する平紐の長さを予め決めておき、測ること自体をやめた。こうすることで、制作時間の短縮に成功、京こまはたくさんの人のもとへ嫁いでいった。現在はこまを応用した季節飾りなども制作。縁起物の「こま」らしく、未来も末広がりようだ。

(取材協力/京こま匠 雀休 075-811-2281)